

令和3年度 第1回外部評価委員会 議事録

1 日時

令和3年7月7日(水) 13:30~15:00

2 場所

宮崎県立農業大学校 本館 会議室

3 出席者

(1) 外部評価委員 8名

香川委員、黒木委員、河野幸委員、奥平委員(代:長友教頭)、小林委員、大石委員、河野賢委員、三田井委員(学校推薦により、委員長に選任)※児玉委員、坂本委員は都合により、欠席。

(2) 事務局 9名

戸高校長、大平副校長、高橋副校長、濱崎副主幹、木下農学科長、垂水畜産学科長、今東教授、平川准教授、工藤

(3) オブザーバー 1名

農業担い手対策課 井口主査

4 議事の内容

(1) 本年度の学校経営方針

(2) 学校評価表(案)評価項目

(3) 意見交換

5 要旨(委員会からの意見及び質問、その回答)

① 評価項目等について、どのような形で作成したのか。(三田井委員長より)

→昨年度の会議を受けて、校内の経営目標と照らし合わせ、令和3年度にどのように生かすかという観点から検討を行った。(高橋副校長)

→新しい目標を設定する際には内容を精査しながら検討した。本課とのすり合わせは行っていないが、会議にも出ていただいているので配慮できていると思っている。(戸高校長)

② 最初に学校パンフレットを用いて、説明した方が分かりやすかったのではないか。評価項目の右横にどれを説明しているのか分かりやすいように、説明要約を載せてほしい。(三田井委員長より)

→以後、そのように改善します。(高橋副校長)

③ 進路状況については例年、似た傾向にあるのか。就農したのは5名だけなのか。(三田井委員長より)

→就農する学生は例年、だいたい10人前後である。昨年度は一番少なく5名のみだったが、令和元年は12名、その前年は9名と多かった。流れとしては、即就農が少し減っており、法人等への雇用就農が増えている。(戸高校長)

④ 雇用就農した学生の卒業後は追いかけていないのか。(三田井委員長より)

→学校としては、特に追いかけていない。雇用就農後、短期間で離職してしまうのが問題となっており、次世代投資資金や事業の関係で、支援員等が情報収集している。(戸高校長)

⑤ 追いかけていないのはもったいない気がするのですが、卒業後数年は追いかけた方が良いのではないかと。(三田井委員長より)

→県でもデータベースを作成しているので追いかけるシステムが作られつつあり、今後も振興公社との連携をしていかなければいけない。(戸高校長)

⑥ 定員について、人数が減っており今後は心配であるため、何か対策をした方が良いのではないかと。高大連携をしているのは良い事なので、県内・県外問わず学生確保に繋がるような取組を模索した方が良い。(黒木委員より)

→平成29・30年以降は減少傾向にある。農業高校を訪問しているが、農業系の学生が減っているように感じている。農業高校出身の割合が7割となっており、農業系の学生が減ってくると学生の確保が難しくなる。普通科系は4年制大学への編入も可能(戸高校長)

⑦ 平成29年以前も定員割れをしていたのか。(黒木委員より)

→平成20年代後半は入学者が50名より少ない時もあった。(戸高校長)

⑧ フード専攻が増設されるなど入学しやすい環境作りが今も出来ており、女子学生が多くなったと感じている。(黒木委員より)

→そうだと思います。(戸高校長)

⑨ 農業高校以外の生徒の確保のため、興味を持ってもらう必要がある。どのような感じか。(三田井委員長より)

→今年も普通科・商業・工業高校からも来ており、フード専攻も増設され、以前よりも幅広く興味を持った学生が来ている。商業・工業からも何らかの関係で、農業系の勉強した

い学生を拾えるようにしたい。(戸高校長)

→7/3にオープンキャンパスを開催したが、その際も農業高校以外からも参加している。

(高橋副校長)

- ⑩ 職業的に子供と関わる事が多く、子供や親に農大のイメージを聞くことがあるが、農業高校は普通科に入れない子が行くところ、農大は本気で農業を勉強したい子が行くところのイメージを持たれている。もっと門を広げないと、農業に興味を持っている生徒(末端)は拾いきれないのではないかと思う。(河野幸委員より)

→学校ガイダンス等を通して、直接生徒と話す機会があるので、より工夫をしていこうと思う。(高橋副校長)

- ⑪ 情報発信について、高校生日く Facebook は年配者が使うイメージがあり、若い世代は Instagram(インスタグラム)や Twitter を中心に使っている。そちらに力を注いでみてはどうか。(河野幸委員より)

→アグリカレッジひなたは Instagram のアカウントがあるが、今年は発信ができていない。農大の Instagram については、これを機に開設に運びたいと考えている。(平川准教授)

- ⑫ 昨年度は指導者不足が課題に挙げられていたが、ドローンの指導者は増えているのか。(黒木委員)

→2名体制でやろうとしている。学生の養成だけでなく、先生のインストラクター資格取得も目指している。(平川准教授)

→3~4年での異動を考えた時に、在校年数が浅い先生に資格取得してもらい、継続していく必要がある。(戸高校長)

- ⑬ 統計を取っていないが、農大生は離職率が高いように思う。他県の農業法人協会の方々と話しても、農大生の離職率が高いと感じている。どうせ辞めると分かっていたら、雇用しづらくなり、地元での就職数が減ってしまう。就職数が減るのは良くないと思うので、学校でも何か対策が必要ではないか。(香川委員より)

→直接的な原因ではないが、人材投資資金関係で、3年で辞めていく人が多いと思う。先日行われた法人マッチングでも企業や学生に話したが、企業と学生の間で最初の情報共有が出来ていないと思うので、互いに納得して雇用できるよう情報共有すべき。最終的には返済の有無関係無しに、働く覚悟等を指導していきたい。(戸高校長)

- ⑭ 卒業生への事後研修はないのか。次世代投資資金の制度自体が良くないのではないかという意見もある。せっかく育てた人材でも3年で辞められると、こちらもきつい。

(香川委員より)

→学校としては(研修等)は行っていない。(戸高校長)

- ⑮ 講義の中で、講師として来た法人の社員等と話す機会があると思うが、若手社員等と少人数で腹割って話す機会を学校の授業で試してみてもどうか。ざっくばらんに話すことで、より会社を知ることが出来るのではないか。(河野委員より)

→講義時間や法人マッチングでの面接時間も短いため、深い話をする事はできないものの、今後検討していきたい。(戸高校長)

- ⑯ 新規就農者が毎年 400 名を超えているという情報で「めでたし」と終わっているが、雇用就農の実態が 3 年で辞めるのであれば、人数を増やすのではなく、確実な定着を目指して進めた方が良いと思う。(三田井委員長より)

- ⑰ 評価シートについて、昨年度と同じ内容が見受けられるが、評価が良い項目は次年度の目標を変えた方がいいのではないか。(河野委員より)

- ⑱ 継続と新規をきちんと決めて、ということでしょうか。(三田井委員長より)

→(⑰⑱含めて)検討します。(戸高校長)

- ⑲ 正直、自分の子供に農業をさせたくない気持ちがある。休みがないため、家族のことを考えると子供の相手が出来なかったことで、家庭が辛い思いをする。良い部分を伝えるだけでなく、厳しい面も含め、いろんな若手就農者からリアル(正直)な話を農大生が聞くという機会も必要ではないか。SAP にも知り合いが多いため、対応は可能である。(大石委員)

- ⑳ 農大が人目につく場面が少ないと思うが、農大生の元気の良さをもっと知ってもらおうと良い。産経大は毎日テレビに出ている。お金が掛かっているため、農大も同様にとはいかないし、回数も少なくなるものの、農大生が元気に勉強している所やイベントごと等は情報発信をしてみてもどうか。(三田井委員長より)

- ㉑ 学生自身が YouTube で発信している学校もある。(香川委員より)

- ㉒ 先生が情報発信するよりも、学生自身が発信した方が、より高校生など若い子に伝わる。(河野委員より)

→(㉑～㉒に対し)ひなたアグリカレッジの Instagram は学生が昨年度発信していたが、学校では管理していない。ひなた MAFiN では情報発信している。(平川准教授)

- ㉓ 資格取得について、「これはいいよね、ほしいよね」という資格の情報を企業等からの情報を得ているのか。(三田井委員長より)

→資料には書いてないが、6/20 から農薬散布用ドローンの資格取得やドローン検定の受験が可能となった。(平川准教授)

→本当に役立っているのかを検証していく必要がある。(戸高校長)

②④ 今年の農大入学生は高鍋農業高校からも少なく、県外大学への進学が増えている。先が見えないと、子供の選択肢に入らない上に、学校側が3年でスパートをかけようとしている。学校として、1・2年生からしっかり指導していく必要がある。地元で育て、地元に残していこうという取組を心掛けている。地元の将来を見据えて、学校という立ち位置で意識していくことが大事だと思っている。(長友教頭より)

②⑤ 今年目標も決められているが、今日の意見も含めて R3 年度の目標等を決めてほしい。今の学生は情報量が多い中で学んでいるため、情報を整理し指導していくことが大変だと思うが、様々な知恵等を集約し、良いものを作っていって欲しい。(三田井委員長より)